



産業廃棄物処理業ヒヤリハット 企業における具体的取組事例

株式会社 ダイセキ

安全衛生情報では会員各社へ伺い、社内における安全衛生の具体的な取組事例をご紹介します。

今回ご協力いただきました会員企業は、昭和20年に三重県で伊藤治雄氏が「油脂精製業」を創業、昭和33年に名古屋市港区で「株式会社大同石油化学工業」を設立、昭和59年に「株式会社ダイセキ」と社名を改称。創業当時より石油・ガソリンの需要に着目し戦後の混乱期を乗り越え今年会社設立60年目を迎える。社内における安全衛生の取組について事業総括本部環境安全部部长代理 鳥居圭一氏、主任 山田拓也氏にお話を伺いました。

◆安全衛生管理組織図

社員数217名の(株)ダイセキ本社・名古屋事業所は、取締役 梅谷伊三雄氏(統括安全衛生管理者)をトップに安全衛生管理図が構成されており、組織内の安全衛生委員は20名で構成されています。

◆安全衛生管理計画書

計画書には安全基本方針として「当社は、安全衛生およびコンプライアンスをすべてに優先させることを基本として『災害ゼロ』を目指す。』を安全スローガンとして「かもはずだろうは事故の元 手間省かずに再確認」を掲げています。

[重点施策]

①安全衛生体制の確立

月1回安全衛生委員会の開催、安全管理者(必要な研修受講)・衛生管理者・安全衛生委員の選任

②安全衛生教育

雇入時・配置転換時の技能講習や特別教育(フォークリフト、ボイラー他)、年2回の廃棄物の危険性・有害性についての教育、年1回以上の協力会社(収運業者)への安全教育

③日常管理、事故後の再発防止

始業・終業点検、安全パトロール(安全業務日誌)の実施、月次での安全対策経過報告・再発防止経過対策の提出

④ヒヤリハット&リスクアセスメント

月1回ヒヤリハット会議を開催し、改善に努める。
月1回リスクアセスメントの実施、隔月での化学物質についての対応を実施



左から山田氏、鳥居氏

⑤機械設備の安全対策

定期自主検査の実施(フォークリフト、遠心分離機、ボイラー他)、転落防止対策設備の導入

⑥作業環境測定と健康診断

年2回の作業環境測定の実施(分析室等)、年1回の健康診断(定期および特殊“年2回有機溶剤、歯牙検診等”)

⑦火災予防(点検および訓練)

年1回の危険物施設の定期点検、年2回の消防設備点検、年1回の消防訓練、もしくは防災訓練の実施

⑧工事の安全対策

随時実施による工事着工届けの提出の徹底、安全対策指示書による工事業者への注意事項の伝達

⑨交通事故の撲滅

毎年3・9月の交通安全宣言と掲示板への貼り付け、毎年4月のSDカード配布、交通安全指導の実施

⑩過重労働およびメンタルヘルス対策

過重労働者に対しての医師による面接指導等の実施、ストレスチェックの実施

◆事件事例

・車両事故の報告

[事故内容]

客先構内にてタンクローリーが廃油引取り時における少量の漏洩事故。

[原因]

手順書に不備があった。写真で流れを説明してあったが、作業時に手順書が手元に無いいため確認事項を失念した。



作業中は車両のドアに「作業確認表」を貼る。

[再発防止対策]

*車両のドアに作業確認表を貼る。

取引先で廃棄物の回収作業時に作業確認表を車両ドアに貼り、作業終了後に取り外す。自社へ戻り廃棄物を降ろす際、車両ドアに確認表を貼り、回収廃棄物をタンクへ搬入し作業終了後に取り外す。取引先でも確認表を貼ることにより、社外においても毎回意識して安全な作業を行うことが狙いです。

*作業中、開けたバルブに「開」のクリップを挟み、確認する。作業後、バルブを閉める際に取り付けたクリップを取り外し、バルブの閉め忘れを防止する。

*指差確認を必ず行う。

*作業中は車両から離れない。

[その他の対策例]

*顔への飛散防止のカバーを取り付けた、面体付き

ヘルメットの配布。(写真 A)

*廃棄物投入口にチェーンを張り注意書きを吊り下げた。(写真 B)

*廃棄物を格納する給・廃油口に覆いをしたり、柵を設け転落防止策を図った。(写真 C、D)

*公道から社屋敷地に入る玄関口のコンクリートやアスファルトが割れて、グレーチングが落下しており、つまづいて転倒する危険性があるため、行政と相談して修復を行った。(写真 E、F)

*安全確認標識、防護柵 (写真 G、H)

安全への取組について

安全衛生において一番重要なことは、業務を行う本人の意識の高さではないかと思えます。どんなに安全な設備や機器を導入しても、それを使用する作業者が適切に使用しないと全く効果がありません。そのため、社員一人ひとりの安全意識を高めるため人材教育に力を注ぎ取り組んでいます。今期の目標でもある「労災事故ゼロ。反応事故、漏洩事故ゼロ。交通人身事故ゼロ。ストレスによる長期休業者ゼロ」が達成できるよう、全員の安全への意識改革を図り、具体的な活動の実施を率先して行いたいと考えております。



2月21日、第21回環境コミュニケーション大賞にて、環境報告書部門で「CSR環境報告書2017」が優良賞(第21回環境コミュニケーション大賞審査委員長賞)を受賞。

